

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

姫将軍
リェネリア
紅蓮の淫城

小説 葉原鉄

挿絵 ジェット世渡り

序章	龍翼旗は暁のごとく	006
第一章	囚われた姫將軍	022
第二章	地下牢に散る純潔	071
第三章	革命の日の肛虐	122
第四章	麗しの家畜姫	179
終章	まるで落日のように	251

登場人物紹介

Characters



リューネリア・ソル・マトゥール

聖アグネリス王国の第三王女にして、「暁の龍翼軍」を率いる姫將軍。領主として民衆を守るという強い信念とプライドを持つ。

エーレン・ドルカヴィク

クランツェル前領主の娘。幼い外見の美少女で、「クランツェルの紅玉」と讃えられている。

シグ・ルケン

「暁の龍翼軍」に配属されたばかりの若く精悍な騎士。リューネリアを慕い、忠誠を誓っている。

メルコフ・ドルカヴィク

エーレンの父親。その悪徳貴族ぶりをリューネリアに糾弾され、クランツェル領主の座を奪われた。

コンドレッシ・ザリ

ザリ教の司祭。穏和かつ寛容な性格で、多くの人々から信頼を寄せられている。

ゴモウ

クランツェル農村部の村人。体毛が濃く、粗野な男。

シーボ

クランツェル農村部の村人。賢く、太っている男。

ビストール

「魔駆け」と呼ばれる野盗集団の首領。

馬鹿らしい行為だと思っではみても、柳葉のようにたおやかな指は止まらない。左手は妄想の男の熱意を宿して、荒れた呼吸に揺れる腹をそつと降っていく。

へソを撫でたとき、こそばゆさに尻が弾んだ。

「はっ、んあああ……」

将軍になったばかりのころに比べて、下半身はずいぶんと重たくなった。それでも、指がムッチリたわわな太腿に触れると、軽妙なゴム鞠のように跳ね動く。

「はあ……あ、あッ、嘘だ……」

自分の身体が別のなにかに変容していくような、甘い恐怖。

その恐怖を求めて、指先はふたたび下着の湿り気の中央に触れた。

「んくうう……ッ」

肩が震えるほどの電流が流れても、手が股から離れようとしなない。歯噛みをして耐えることになっても、手に宿った男の熱意が濡れた縦溝から離れたがらない。

さきほどより湿っている。いや、刻々と湿り気を増している。おまけに、指を飲みこまんばかりに、下着の下で秘部が柔らかくなっていた。

「や、やめろ、私……！ バカか、私……んはっ、ああ……ッ」

みずからを咎める声は、徐々に艶っぽく高まっていた。

割れた肉唇の狭間へと、左手の指先がゆっくりと沈んでいく。右手の指先も、疼きを優



しく押し潰すように乳房へと沈んでいく。

頭の中で、その指の色は白ではない。よく焼けた、小麦色。まだ若い男の手だ。

優しく愛撫をしてくるのは——シグ・ルケン。

彼はすこし窄ませた唇で、リユーネリアのほどけた髪に口づけを——。

「んああッ……！！ はううう……ッ！」

電流が脳まで届き、思考を焼く。つま先をギュッと折りたたみ、顎を突き上げた。全身の毛穴がジリジリと痺れている。

(こ、これは……もしや、イクという、アレなのか……)

両手を離しても、しばしの痙攣に苛まれる。悶えるようにうつ伏せとなり、枕を噛んで恥ずかしい声を隠した。

間もなく痙攣が収まっても、呼吸の乱れと身体の火照りは抜けなかった。

「ば、馬鹿者め……！ ええい、恥知らずめ、私め……！」

顔を枕に埋めたまま、脚をバタつかせてベッドを蹴る。拗ねた幼児のような仕種だが、なんとか動かなければ羞恥心で全身が破裂しそうだ。

「なにがお恥ずかしいのかしら？」

後ろからの声に、リユーネリアは思わず「うえっ」と奇声を上げた。

いつの間にもやら、エーレンが扉を開けていた。

「い、いつから、そこに？」

「今さっきですわ。姉様、うなされていらっしやったようですが」

「いや、その、なんでもない」

エーレンはおかしそうに笑い、机に置かれた龍型の水差しからコップに水を注ぎ、差し出してきた。

「喉が渴いたままだと、寝ている間に病気になっちゃいますわ」

リユーネリアはうなずき、飲み干した。汗をかいた分だけ、気持ちよく潤う。

薄赤い髪の少女はベッドに腰かけ、リユーネリアの横に詰めてきた。

「姉様、姉様、実はおねむの前に、聞いていたいただきたいことがございますの」

紅の瞳が茶目っ気たつぷりに碧眼を覗きこんでくる。他愛のないイタズラをしたときの目つきに、リユーネリアの羞恥心は紛れていく。

「悪い子がまた私を困らせようとしているのかな？」

エーレンはクスリと笑い、左手の中指にはめた指輪を見せてきた。すべてを映し、焼きつくすような紅い寶石がはまっている。

「これは、グネアの目。父様秘蔵の神代武器ですわ」

「聞いたことがある。念じれば炎が生じ、そして自在に操れると」

「父様が神剣から核になる部分だけを取り出して、指輪にしたものです」

「うふふ、可愛らしいお方……とってもステキな匂いですわ」

エーレンはイタズラっぽく笑うと、そそり立つペニスの真上で大きく口を開いた。ひゅつと息を吸い上げ、雄の臭気を幼い口腔で飲みこむ。シグの顔が赤らんでいく。

「や、やめろ、エーレン！ そのような淫らな真似、おまえのような子どもが……！」

男根の上で、紅の瞳がそっと細められた。炎より赤いというのに、非情なまでに冷たい。嗜虐的で、突き放すようで、呆れたような目つきであった。

「ブルワン病というものをご存じありません？」

その一言が、リユーネリアに何度目かの大きな衝撃を与えた。かつて宮廷で、そういった名前前の病について聞いたことがある。

「神統貴族の肉体が、成熟を停止してしまう病……」

「私の本当の年齢なんて調べればわかることですのに、姉様ったら本当に盲目のよう。ちよっと子どものふりをしたら、コロッと騙されて」

艶やかな笑みに、克蘭ツェルでの五ヶ月が鏡のように脆く砕け散る。

今まで信じていたものは、偽りの虚像にすぎなかった。

節穴の目がうっすらと潤い、腹が音を立てて空腹を訴える。

「満腹になれば、すこしは目も開くのではないか？」

メルコフの指が鳴らされると、平民が二枚の皿を牢に差し入れてきた。どちらも野菜屑

入りの粗末なスープだが、煮こまれた野菜の香ばしさが胃袋を刺激する。

嗅ぐだけで空腹が極まり、自然と口腔が唾液に満たされた。

「どちらか選ぶがよい。片方だけくれてやる」

「どちらも私の特製です。片方には、栄養たっぷりタンプク質を入れておきました」

「タンプク質、だと？」

リユーネリアが問いかけると、エーレンは口元を手で隠して含み笑いをした。

「殿方の、濃い濃い精液……平民のザーメンですわ」

「な……！ そんなもの、飲むわけがないだろう！」

「ちなみに、もう片方はシグ様に打ったのと同じ薬入りですわ」

ぐ、とうめく姿が、ドルカヴィク親子の薄ら笑いで見下された。

パチッとリユーネリアの中で火花が弾ける。

空虚な心は嗜虐的な態度に触発され、爆発した。

「貴様たちのような卑怯者に施しを受けるより、私は死を選ぶ！」

「その死がシグ様のものであっても？」

エーレンが左手の中指にはめた紅の指輪を舐め、シグの股間に近づけた。

「睾丸と男根をすこしずつ炙り灼きにしてみるのはいかがかしら」

その言葉に、シグが身悶えをして反応した。メルコフも顔をしかめ、ゴモウとシーボは

青ざめている。平然としている男はコンドレッシただけだ。

どれほどの苦痛なのか、女の身では想像しがたい。ただ、炎のような憤りは行き場を失い、空腹の胃袋をジリジリと焦がした。

「卑怯な……いたぶるなら、私をいたぶればよいではないか！」

「食べればそんな酷いことはしないと云ってるのに……姉様のわからず屋」

リユーネリアはふたつの皿と、シグの顔を順番に見やった。

屈辱に耐える騎士の顔を見て、唇を噛む。その痛みを決意の印とした。

「そちらを飲む」

顎をしゃくって示した。

「では、たっぷりお召し上がりください」

片方の皿が手前に押し出されてきた。

精液入りか、はたまた媚薬入りか。前者であれば、おそらく吐き気との戦いとなるだろう。精液など舐めたことも嗅いだこともないが、食べ物でないことは明らかだ。後者であれば、反乱の夜に寝所で感じたような感覚に悩まされるのだろう。シグの苦しみようを見ていると、何倍も苦しいのかもしれない。

どちらがいいともいえないが、忍耐しなければならぬのは確かだ。

「……くっ」

石床に膝をつき、前屈みになって、皿の縁に口をつけた。

唇をスープに浸し、ずず……と、軽くひと口を含んでみる。下品であっても、音を立てて啜ることしかできない。

「いかがです、姉様？　美味しい？」
「まずい」

とは言うものの、野菜の旨みがよく出ている。やや温ぬるいが、それでも胃袋に入ると熱い活力を湧き出させた。

（味のほうは普通……ということとは、媚薬入りということか）

やがて下腹を襲うであろう疼きを考えると、素直に味を楽しむこともできない。臍せい下丹かたんに力をこめ、尖らせた美唇でゆつくりとスープを啜った。

ツルリ、とヌメつく塊が口腔に入りこむ。

なにも考えずに噛み潰した——その瞬間、苦みと生臭さが口腔を埋めつくした。

「うっ、くふッ！」

鼻水のように半溶けの塊が、猛烈な異臭を放つ。喉と胃袋が吐き気に悶えた。

とても飲みこめたものではない。不快感のあまり、額に脂汗が浮かぶ。

「ん、んむうう……！　んおえッ、えうううう……ッ」

「ザーメンお食べになりました？　精液は加熱すると固まっちゃうんですのよ」

返事などできない。えづきを抑えても肩が大きく律動する。

男が、その性器から吐出する、粘性の、体液——そんなものは、尿と大差ない汚物ではないのか。それを口に入れるのは、どれほど穢れた行為だろう。

味そのものも最悪に不味いが、汚辱を強要されることへの屈辱感も相当なもので、顔が加速度的に紅潮する。思いきり暴れて、皿を叩き割ってやりたいところだが、シグの命がかかっていては無茶もできない。

（の、飲んでやる……！ こんなもの、喉元すぎればなんとやらだ……！）

しかしながら、舌は塊を乗せたまま硬直しており、延々と悪夢のような味に囚われている。どうせなら、喉が素直なうちに勢いで飲みこむべきであった。

「がんばれ、姉様。好き嫌いはダメダメですよ」

うるさいと怒鳴りつけてやりたい。スープで膨らんだ頬が、まるで拗ねているようだ。

ぷちゅつ、と口の端からスープが漏れた。ゴモウが「おお」と興奮の声を上げる。リユ―ネリアはそれが疎ましく思えて、怒りの勢いで口内の残りを飲みこんだ。

「ぐっ……！ はふ……」

空になった口で息を吐くと、生臭い匂いが鼻孔を抜けた。自分の口内が平民の淫欲に汚されたようで、なおさら情けなくなる。

媚薬入りのほうがよかったのではないかという後悔を、すぐに否定する。高潔な騎士が

人前で裸にされても、なお勃起を抑えられなくなる薬である。自分もどうなってしまうかわかったものではない。

一瞬の屈辱であれば、無理やりに飲みこめばいい。

リユーネリアは固形化した精液とともに、スプーン吸りを再開した。

つるり、つるりと精子塊が滑りこんでくる。そのたび、

「うぐっ」

と眉を寄せて唸る。基本的にはすぐに飲みこむが、たまに誤って噛み潰してしまい、強烈な吐き気と戦うことにもなった。

ズズ……ズッ、ずちゆるるうう……ずずじゅっ、ちゆるっ……。

淫猥な水音に合わせて、猿ぐつわをかけられたシグの鼻息が荒くなる。上目遣いに見上げてみると、彼は顔を背けながらも、チラチラと視線を向けてきていた。股間では肉隆起がいつそう激しく脈動している。

「うふふ……シグ様ったら、姉様のザーメン吸りでそんなに興奮して」

「これ、エーレン。いちいち言わんでもよろしい」

「だってお父様、今にも甘くて美味しいのがドピュドピュしそうなんですもの」

エーレンは陶然としていた。リユーネリアにはそんな彼女が信じられなかった。

「ぢゅぢゅ……ちゆるッ、ふあう……」

あらためて啜り取り、舌で味のほどを測ってみるが、甘いなどということはない。

(こ、こんなに苦くて、生臭いではないか……！)

加熱のせいで味が変わったのか、シグのものは特別なのか。後者だとすれば、エーレンはすでにシグの精液を飲んだということだろうか。

(エ、エーレンもこんな風に皿に注いで下品に舐めたのだろうか……)

幼い身体つきの少女が四つん這いになり、皿いっぱい溜まった精液を舐める様を想像すると、猫のように愛らしく思えた。自分もそんな風に見えるのだとすれば——そのせいでシグのペニスが感動に震えているのだとしたら——。

夢想到鼓動が速まり、下腹がドクドクと疼いた。寝所で感じたのと同じものだ。

「はあ……んむッ、んぢゅうう……」

幾人もの視線を受けながら、水音もわずかながら調子を上げていく。

やがて唇から熱感が消えた。いつの間にか皿の底が覗けている。

「んぐう……！ の、飲んだぞ……！ これで、満足か！」

恥じらいと戸惑いを誤魔化すように、強い口調で言った。

「あらら、まだ残っていますよ。食事の際には民草の作物に感謝して残さず食べるとは、姉様のお言葉ですわ」

「わ、わかつている……！」

リユーネリアは唇を窄めた。しかし、高い鼻が邪魔になるような気がして、しばし逡巡したのち、舌を出した。

「れるう……ちゅくつ……」

めいっばい舌を出し、皿の底を舐めていく。精子の塊はすでないが、効率が悪い上にこぼれやすい。口元が汚れても、拘束された腕では拭うこともできない。恥の上塗りをくり返しているようで、心苦しかった。ぴちゅぴちゅと音を立てていると、本当に猫になったように惨めつたらしい。

ああ、とエーレンが感極まった声を出す。

「みなさま、まるで姉様にペニスを舐められているような気分になりませんか？」

んー、とシグが大きくうめく。彼はきつと想像している。自分の逸物に、高潔な将軍がしゃぶりついているところを。実質、それはリユーネリアの妄想にすぎなかったが。

(なぜ……なぜ、こんなことばかりを、私は考えてしまうのだ……！)

腹の奥が熱くなるたび、思考はますます淫らな方向に進む。恥辱の悪循環の最中、金色の鎧に守られた腰尻が、なにかに耐えるようにモジモジと蠢く。

「ふん、まるでブタのように尻を振っておるわ」

「シグ様、あのいやらしいお尻を抱えて、滅茶苦茶に犯したいと思うでしょう？」

妄想を刺激するようなことを言われて、リユーネリアの腰は大きく真上に跳ねた。



シグもまた腰を震わせ始めた。肉茎が苛立ったように膨張する。

(さ、さつきより大きく……あ、ああ、私のほうを見て、ペニスがどんどん青筋を浮かべて……！　こ、こんな、獣のような……！)

子をなすために用いられるモノは、あまりに醜悪な有様を見せつけている。しかし、リユーネリアは我知らず上目遣いで怒張に見とれた。残り汁を舐め取る舌も、蕩けだした心を反映して、唾液をねっとり絡ませる。

「れるっ……ふぢゅっ、ちゅぶう……んりゅっ、ぶはっ……あはああ……」

スープまみれの口元に、湿っぽい息が絡みつく。まるでその息がかかったかのように、シグのペニスがカリ首を激しく揺らした。

「あはっ、もうガマンの限界？　そうですわね、憧れの姫君のあんな淫らな食事風景を見せられて、耐えられるはずございませんわ。なら、イッちゃいなさいな！」

エーレンが軽く亀頭をつついた。

「ふグッ、んぐおおおおおッ！」

男らしく小さな尻がビクビクと激しく痙攣した。

(イ、イクのか、シグ……！　ああ、私が今まで舐めていたようなものが、あんな狭い穴から出てくるのか……！)

舌を止めて釘付けになった姫將軍の眼前で、鈴口がパツクリと全開した。

びゅぐんッ、ぶりゆりゆううッ！ どびゅッ、びゅぶッ、ビュッ！

噴き出した白濁液は高く放物線を描き、鉄格子に引っかかりながらも、這いつくばったリユーネリアに降りかかった。

「あッ！ あふッ、んううう……！」

ピタ、ピタタ、と粘液の貼りつく音が、頭蓋骨にまで染み渡る。頭頂部のつむじに、皮膚を溶かすような熱ととろみを感じた。

（ふああ、染みこんでくる……！ シグの精液が、私を汚している……！）

金髪と円冠が餌食となり、前髪を伝って鼻にまで滴ってきた。糊のように粘ついて、白磁の肌に濁った汚辱感を残す。瞬く間に顔が男汁にまみれていった。

かわさなければいけないのに、手足は動かない。もつと浴びていたいというように、悅樂的な痙攣をきたしている。

身動きできない姫君へと、尽きることのない粘濁が次々と降りかかった。

「ふああッ、く、んくうううう！」

シグの出したものだと思えば、耐えられる——と、いうよりも、シグが目を潤ませて、勢いよく射精するところを見てみると、言いしれぬ甘みが胸に湧く。

（こんなにも、男は出すというのか……子を孕ませるため、こんなにも……）

火照った想いを女の欲情と理解せぬまま硬直していると、不意に舌が熱と生臭さで叩か

れた。そこで初めて、自分が舌を出しっぱなしであることに気づく。

「あんううう……！ んひつ、にがいい……！」

加熱されたものとは一味違う、新鮮な精子に喘いでいると、

どびゅッ！

とびきり長いひと筋の粘液が飛んできた。先端がリュウネリアの背にピタリと貼りつく。そのまま頭と顔にも降り注ぎ、皿を避けて床から鉄格子に引っかかる。量に比例して臭みも増していた。

「はふう……あう、ああ……す、すごい匂い……」

シグの射精が止まったのち、リュウネリアは彼とともに肩で息をした。皿の中は、後から降ってきた精子以外はなくなっている。なにも言われないので顔を離すと、粘ついた液がトロおりと糸を引いた。

「シグ様、お喜びくださいまし。姉様はシグ様のザーメンをかけられて、とつても悦んでくださっていますわ。ほおら、あんなに目までトロトロ」

シグは一粒の涙をまぶたで嘔み潰していた。

「勝手なことばかり、言うな……！」

リュウネリアは吐息まじりの弱々しい声しか出せなかった。顔に粘りついた液に力を奪われてしまう。上半身を起こそうにも関節に力が入らない。

「ひい……ッ！ あつッ、あつ……精子あつひいッ！」

手足がビクビクと脈打つ。顔に降りかかる熱を感じるだけで、小さな絶頂感に打ち震えていた。

顎先から喉を伝うこそばゆさも、鼻梁から前髪に貼りつく粘着感も、乳房を揉みこまれる快感に劣ることなく気分を淫らに盛り上げる。

「はああ……いやあ、精子の匂い……！ わたし、染まってくう……！」

「チンポまみれで嬉しいだろう？ もっと味わいたいんじやねえか？」

男たちは示しあわせて、リユネリアを引き起こした。軽々と、まるで性欲処理のための便利な道具を扱うように。

ゴモウの上にまたがったかと思うと、数人に脚を抱えられ、「そおれ」と独楽こまのように方向転換。男たちのふざけ半分で淫感肉はねじれ、猛烈に熱く沸騰していく。

「んくひッ！ わ、私、嬉しくなんかあ……ああああひひいひいッ！」

否定をしてはみても、自分の表情が緩んでいることは自覚できた。脚を離され、膣結合が深まると、だんだん顔の力みが抜けていく。

反りの浅い肉槍は真っ直ぐ蜜膜を擦り上げ、穂先を最奥に突き入れた。

「おあああッ！ あひああッ！ お、奥う、奥おくおくうッ！」

肉尻の重みが子宮口に集中し、ヨダレが垂れ流しになるほど享樂的な圧迫感が生じる。



またも軽い絶頂感に腰尻が媚動した。ゴモウも女の重さを腰と男根に受けて、充足の身震いに浸っていた。

リユネリアがふらついて前のめりに倒れそうになると、新たに別の男が乳内にペニスを挿入し、上下ピストンを開始する。

「あんっ、ひああああ、胸ッ、ああん、擦れて熱いい！」

柔肉たつぷりの重たい媚乳がこれでもかと弾み回った。乳淫につられて、全身が不定期に蠢動を始める。

ぬちゅッ、ぐちゅッ！ ぶちゅッ、ぢゅばあッ！

リユネリアはほぼ無意識に尻を後ろに突き出し、粘つくようにねじっていた。

「やひッ、ふいふいッ！ こ、腰い、くひあッ！ ねりねり動いひやううッ！」

姫将軍の肉桃は中心の割れ目をヒクヒクと痙攣させ、豊かな皮下脂肪をうつすら波打たせる。

畜舎の高まりにつれて、陵辱者も増えていく。頭を乱暴につかまれた拍子に、右側で括っていた髪がほどけた。なめらかにこぼれる絹糸に、また多くの男根が群がる。

男の体臭が濃くなるにつれて、頭は淫色の霞に覆われていく。

（ふああ……も、もう、なんでもよくなってくるう……！）

ひと筋の涙とともに、全身の性感を意識した。雄肉に充ち満ちた膣内はもちろん、乳間

摩擦で刻々と先走りにまみれていく胸まで、痺れるほどに心地よい。もう少して、神統貴族として生きてきた二十三年が消えてしまうように思えた。

（わ、忘れたいい……！ 気持ちよくなって、真っ白にい……！）

矜持がなくなってしまうえば、ただよがり狂っていられる。男たちが顔のそばに股間を寄せてきたときは、天恵だと感じた。

「はううッ、あひああああッ！ ほ、奉仕、しますう……！」

左右一本ずつ手で握り、その無骨な硬さに胸をときめかせる。手近な一本を舐め上げ、乱暴な熱さに目をトロロンとさせる。すぐに手でしごき、口に啜えることにした。

「んぢゅばあ……ッ、んりゅああッ、ちゆるッ、ちゅばッ」

しゃぶればしゃぶるほど、生臭い肉の味が甘露に変わっていく。口内粘膜はトロトロに爛れ、さらなる肉味を求めて紅亀頭に吸着した。

「おおッ、すっげ……！ この淫乱貴族、急に積極的になってきたな」

侮辱も受け入れてしまえば、忘却を促す愛撫のように感じられる。笠の張った醜い肉棒が愛しい。髪や腋を撫でられると、くすぐったくて淫笑が漏れる。金色の脚甲に腺液を塗りつける慌てん坊など、実に可愛らしいものではないか。

ぷっくり膨らんだ亀頭に、吐き出される透明汁——それらがやけにありがたくて、なにもかも捧げるかのように、額の円冠をそっと押しつけてみた。

「はあ……！」

ぬりゆ、ぬりゆ、と王族の誇りが汚れていく。

「あはっ、ふわあ……おチンポがあ、頭の中、入ってくるみたい……！」

取り返しのつかない喪失感に身震いをした。にわかには蜜穴が粟立ち、欲深に肉茎を圧搾する。ゴモウはうめきながらに蠢動を止めた。すぐ再開するが、さきほどよりずっと余裕のない高速ピストンに変わった。

「くふっ、おああああッ！　そ、それ、いいですよ！　お腹の中、擦り切れちゃいそう……！　おチンポ、本当に好きになっちゃいますうううッ！」

鳴き喚くほど嬌艶に浸る。平民に敬語を使うことにも違和感はない。

ゴモウたちも抑えることなく快楽の声を上げていた。リユネリアの腰尻に指を食いこませ、懸命に射精欲を押し殺している。

紅蓮の肉腔はすっかりペニスの味に病みつきで、掘り返されるほどに媚び湿った。腰遣いの激化に振り落とされることもなく、ぬっちゅりと男根に絡みつく。

「ひやおおおッ！　な、中、たまんなくなるううう！　おひッ、おああッ、焦げるぐらい突いてくださいいいッ！　ふええああああッ！」

リユネリアは蕩け腰をこれでもかと振り回し、カリ笠が食いこみねじれる感覚を淫蜜粘膜で存分に味わった。腰骨の碎けるような痺れに身震いする。

どの結合部でも、どの接触部でも、摩擦のあまり泡立った液汁が淫猥なピンク肌を彩っていた。淫靡な薄絹をまとって、柔胸も弾み踊っている。まわりのペニスをしゃぶるたびにヨダレが落ちるため、谷間にはすっかり泡液が溜まっていた。過剰なまでのぬめりと律動に、雄肉もビクンビクンと跳ねる。

「あはっ、おううん！ む、胸え、胸もお、あはっ！ も、もっとお……！」

「あ、ああ、メッチャクチャにしてやる！」

威勢のよい腰遣いで、艶美に鳴く細顎がコツコツと打たれた。乳肉が彼の腹と鎧の胸当ての圧迫でひしゃげ、妖しい色艶に染まっていく。両乳首を指の腹でギュリギュリと力強くねじられると、痛みまじりの悦笑が浮かんだ。

「んふあああ……！ んちゅっ、ぢゅっ……ひぶあつ、あまあい……！」

何本も舐め回ったせいか、なにを舐めても甘ったるい。母乳を吸う赤子のような熱意をもって吸引し、男の忍耐のエキスを味わううち、

ゾクゾクゾクンッ！

と、背筋にまで蕩けるような甘さを感じた。

「あつ！ あッ！ あーッ！ な、なんだか、く、くるうううッ！」

頭の中がチカチカと白黒に明滅する。碧眼の焦点が合わなくなり、すがりつくように強くペニスを握った。ぬめるので、自然としごき立てることになる。

内外をなぶる肉莖も、まるで不安定な身体を支えるがごとく、次々に膨張率を上げていく。いつそうキツくなった肉挿しに、馬乗りの姫君は気の狂ったような上下グラインドで応えた。

パン、パン、パン、と雌の尻と雄の腰が打ちあう音が鳴り響く。

「あああひいいいッ！　こ、このままイカせてくださいいいいッ！　お願い、お願いお願いイキたいのおッ！　イキたいイキたいひきたひいいいッ！」

頂点目指して高まりつづける性感に、垂涎ながら高く叫ぶ。

感涙まじりに、しなやかな騎士の肢体をはしたなくよじる。

「お、おお！　いけいけ、イッて狂って本物のチンポ専用家畜になっちゃえ！」

ゴモウを始め、男たちも猛然と蠢動した。

ぐじゅッ！　ぼチュッ！　ばちゅッ！　バちゅンッ！　バチュンッ！

「んふううううッ！　んぢゅひッ、うれひいいいッ！　ぢゅぽぽおッ！」

口内の逸物に喉を突かれても、たくみに舌を絡めて感悦する。ほかにも何本もの汚肉で顔や目元を突かれるため、まぶたを開けない。手の中や乳房、髪などに小刻みなペニス脈を感じられると、それだけで全身が熱くなる。

「あひゃんッ！　んぢゅつ、ひゅごいいッ！　ふひいいいいッ！」

子宮口を滅多打ちにされ、内膜を搔痒感に似た痺れで満たす。

リユーネリアが「んひゃっ」と身を竦めたのと同期して、性器を晒した全員が最後の愉悦に身体を脈打たせた。

「きてえ、きてえええええッ！ ザーメン様きてえええええッ！」

リユーネリアは大口と舌出し、二穴収縮で男汁を欲した。そこに高貴さは欠片もない。極まった性感を射精で撃ち抜かれることだけを望んでいる。

淫女の痴態を戒めるように、欲肉の砲塔が白い火を噴いた。

どびゅぶびゅッ！ びゅぶばッ！ びゅぐびゅぐびゅぐびゅぐんッ！ ぱびゅるるううッ！ びゅくんびゅくんびゅくううッ！

粘濁感が顔も胸もなく肌に降り注ぐ。灼熱感が容赦なく膣奥に満ちていく。

「ああああッ！」

リユーネリアは一瞬で全神経を溶かされ、悦楽の極みに押し上げられた。ぬかるみに覆われた白い肢体が、弓なりにのけ反る。

「イクイクイクッ！ イクいくいくいくひくうううイクひくおおおッ！」

アクメ声に畜舎が揺れた。閉じたまぶたの裏に脳を焼きつくすような閃光が走る。目映い光は稲妻となって、精液を受けた部分の性感帯を貫いた。

バチン、バチン、と連発される絶頂感の乱れ打ち。毛穴が開いて脂汗が溢れるほどに熱く、唾液が甘露汁に絡んで垂れ流しになるほど甘い。

ビクンッ、ビクンッ、と手足が脈打った。痙攣しながら、白い辱雨を浴びた。そこで突如、子宮が「ぼこり」と沸騰感を醸した。

内膜に張りついていたホグボアの精汁が、ゴモウの液に反応を起こしたのだ。

「ひゃふいッ！ し、痺れっ、子宮うしゅごいいおおおッ！」

オルガスムスに浸った腹膜が、形のないかぎ爪で掻きむしられたような、残酷なまでの追快感。腹が突っ張るように跳ね上がった。

自分の人生が、吹き飛ばされてしまった——そんな感慨も一瞬で、リユーネリアはだらしのないアクメ笑いで口内に広がる腐臭をクチュクチュとねぶり味わった。

「おいメスブタ、そんなにザーメン様が好きか？」

耳の裏に粘液を塗りこめられながらの、辱問であった。

「ふぢゅっ、んばあああッ！ ザ、ザーメン様あ、おチンポからたくさんのザーメンさまあ……んぢゅぢゅっ、ちゅぶあ……ザーメンしゃま、おいひいれすう……」

淫乱そのものの口調で応じて、被虐感に打ち震える。乳房の間から、もつれた舌の上に濁液が飛んできた。すでにふたつの柔玉は胸当てと一緒に白く飾り立てられているが、それでも飽き足りないというように射精が続く。

「あはッ、まだまだ出てるう……うれいですうっ、あはあああッ！」

乳間から突き出された亀頭にキスをひとつ。続いて眼前のペニスたちにキスと液啜りの



オマケつきを一回ずつ。両手にしたモノたちには、根元からカリ首まで優しくしごいて残り汁の吐出を促す。

白濁にまみれていない部位は、どこにもない。太陽のようにきらめいていた金髪ですら、ことさら男根に巻きつけられ、しごきながら精液を塗り伸ばされていた。

(あはは……わたし、すごい嬉しい……ザーメン様みれ、ステキい……)

リユネリアは長々と絶頂感の尾に囚われ、茫洋と奉仕を続けた。臍気な目つきは乱交の悦びに染まっている。

だが、ゴモウにペニスを抜かれた途端、開きっぱなしの膣穴に水を差すような冷氣が染みこんできた。

思い出したくないことが、思い出されてしまう。

「あつ、いやああ……まだ、抜かないでえ……!!」

皮肉っぽい笑みが平民に広がった。胸の男が、顔のまわりにいた男が、次々と離れていく。男たちの肉の温もりを失うと、汁まみれの身体がやけに冷えた。

「へ、へへえ……情けねえツラしてやがるなあ」

「だ、だつてえ、入ってたらまだイケるのに……!! 元に戻りたくない……!!」

リユネリアは土下座じみた四つん這いで、涙と口汁を藁に垂らした。空洞となった淫裂と肛門からも、ゴポリゴポリと同時に液塊がこぼれる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>